

〔対象と方法〕進行胃癌22例を対象とした。その切除新鮮凍結標本について免疫組織染色を行い、胃癌細胞における HLA-DR 抗原の発現状態、リンパ球の浸潤程度を検索した。HLA-DR 抗原の発現状態は4段階で評価し、-, ±を減弱例, +, ++を発現例とした。リンパ球の浸潤程度は、1mm²あたりのリンパ球数を計測し、判定した。

〔結果〕HLA-DR 抗原の減弱例は9例(41%)、発現例は13例(59%)みられた。その発現と胃癌の進行程度、組織型との間には一定の関連は認めなかった。浸潤リンパ球数は、減弱例では924±268/mm²、発現例では1,578±347/mm²で、発現例で有意に多かった(p<0.01)。この成績より、発現例では腫瘍局所にリンパ球が多く浸潤し、抗腫瘍性免疫応答が発現することが示唆された。

12. マウス肝転移モデルにおける肝類洞内および脾リンパ球の解析

(第二病院外科)

吉松和彦・遠藤俊吾・木下 淳・加藤博之・森 正樹・芳賀駿介・小川健治・梶原哲郎

〔目的〕転移局所における免疫応答を調べるために腫瘍投与方法により3群に分けたマウス肝転移モデルを作製し、肝転移結節数、肝類洞内および脾リンパ球の表面抗原を解析した。

〔方法〕肝転移作製方法は腫瘍門脈内投与前に皮下に腫瘍移植する群(1群)、腫瘍門脈内投与前にMMC処理した腫瘍細胞を3回皮下接種する群(2群)、無処置で腫瘍門脈内投与する群(3群)で門脈内投与後14日に犠牲死させた。

〔結果〕肝転移結節数は1群と2群で3群より転移数が少なく転移は抑制された。肝類洞内リンパ球サブセットをみると1群と2群ではCD3, CD4, CD8陽性細胞が増え、特に、CD8陽性細胞が増加していた。また3群ではNK1.1陽性細胞が増加していた。脾では肝類洞内でみられた変化は認められなかった。

以上より1, 2群における肝転移の抑制にはMHC拘束性の免疫応答が関与している可能性が示唆された。

13. 細菌性スーパー抗原の生体毒性発現の機序と *in vivo* トレランスの生体防衛的役割

(微生物学免疫学)

藤巻わかえ・

巖 小傑・李 暁宇・内山竹彦

スーパー抗原性外毒素の生体毒性は、外毒素による直接の毒作用ではなく、T細胞活性化を介して産生さ

れるサイトカイン(主にTNF α)による生体の異常反応であると推測されている。スーパー抗原の一つであるブドウ球菌エンテロトキシンA(SEA)はトキシックショック症候群の原因外毒素の一つである。我々はその生体毒性の発現機序を検討する目的で、各種条件下のマウスにおけるSEAの致死作用やサイトカインの動態を検討した。

CD4除去マウスはSEAの致死作用を免れたがCD8除去マウスは致命的だったことから、毒性発現にはCD4⁺細胞が関与していると思われた。この致死作用は、SEA前投与でトレランスを誘導するか、抗TNF α 抗体を前投与することにより、回避できた。以上より、生体毒性発現には主にCD4⁺細胞が関与していること、CD4⁺細胞にトレランスが誘導され生体防衛に役立っていること、毒素発現にはTNF α が主役を演じていることが示唆された。

14. 小児ネフローゼ症候群における高IgE血症の検討

(腎臓小児科)

西本五郎・

甲能深雪・伊藤克己

〔目的〕小児特発性ネフローゼ症候群(ネ症)に高IgE血症やアレルギー性疾患の合併頻度が高く、ネ症発症機序においてアレルギーの関与が指摘されている。今回血清IgE値、IgE産生調節に関わるB細胞表面マーカーであるCD23, CD23を誘導するサイトカインであるIL-4の動態につき検討した。

〔結果〕MCNSの再発時において、CD23百分率、CD23/CD19が有意に増加したこと、CD19百分率、CD19陽性でCD23陰性細胞百分率に変動が認められなかったことから、CD23が増加したことが明らかとなりMCNSにおける成熟B細胞の増加にはCD23発現の関与が示唆された。CD23百分率とIL-4濃度とが正の相関を示し、CD23/CD19と血清IgE値が正の相関を示したことから、MCNSにおける高IgE血症の発症機序として、IL-4に誘導されたCD23がIgE産生亢進に関連すると示唆された。

15. 膜型免疫グロブリン関連蛋白の融合蛋白作製について

(神経内科)

清水優子・

Peter K. Gregerson・Nicholas Chiorazzi

〔目的〕近年、MB1遺伝子であるIg- α 、B29の遺伝子産物であるIg- β はB細胞表面でmIgMと非共有結合し、B細胞のシグナル伝達、分化、活性化に重要であることが解明された。我々はこれらの蛋白の特徴を